

## 与えるものこそ与えられたもの

私の大学生活のスタートは、決して志の高いものではありませんでした。「先生になりたい」という目標を持って大学に進学したものの、いざ講義を受けてみると、どこか自分とは合わないという違和感がありました。その違和感から目を背けるように、1、2年生の頃は特に目標も見出せず、ただ自堕落に、流されるままの毎日を過ごしていました。そんな頃に出会ったのが、首藤ゼミです。そこには、これまで自分が避けてきた「自分と厳しく向き合い、思考を深める場所」がありました。このゼミを選んだ時、私の心の中にあっただのは「今の自分を変えたい、変わりたい」という切実な願いでした。そんな願いから同期のみんなから頼られる先輩の存在に憧れてゼミ長になったのかもしれませんが。

ゼミの活動を繰り返す中で、私はある大切なことに気づきました。それは、今の自分にできること、そして今、私が後輩の皆さんに伝えたいことは、「決して私一人の力で得られたものではない」ということです。私が今持っている知識や技術、そして考え方は、全て誰かから「与えられたもの」です。厳しくも温かく導いてくださった先生、切磋琢磨し支えてくれた同期の仲間、成長の仕方を教えてくださった先輩方、そして何より、どんな時も信じて見守ってくれた家族の存在。先生、仲間、そして家族から受け取った数えきれないほどの想いや意思を、私は比喩的に「火」のように捉えており、彼らから受け取った無数の「火」が私の中で燃え広がり、今の私の原動力となっていると強く感じています。自分一人で最初からできたことなど、何ひとつありません。そのことに気づいたとき、学びは自分のためだけの利己的なものではなく、誰かに繋いでいくためのプロセスへと変わりました。私は、これからも自分が受け取った「火」を絶やすことなく、次の世代へと繋いでいきたいと考えています。私たちがこれまで学んだことは、時代と共に変化していくかもしれませんが、しかし、その根底にある「火」は、正しく受け継がれるべきものです。私が先輩方から受け取り、後輩の皆さんに手渡そうとしているこの「火」を、皆さんもまた大切に守り、さらに大きくして次の誰かへと繋いでいって欲しいと思います。

私はこれから、税理士資格の取得を目指して、大学院という新しいステージに進みます。自堕落だった私が、ここまで前を向けるようになったのは、この場所でたくさんの「火」を分けてもらったからです。皆さんが創り上げるこれからの首藤ゼミが、もっともっと互いを思いやり、高め合える素晴らしい場所になることを心から願っています。

2026年3月15日

首藤ゼミ第5期ゼミ長

佐々木 文也